

# 『給日語初學者的 CLIL 教材』

## 『日本語初学者向けの CLIL 教材』

- 一、 動機
- 二、 CLIL 指導法の概要
- 三、 作品の構成
- 四、 五つ授業の紹介
- 五、 教学実践とフィードバック
- 六、 感想
- 七、 参考資料

## 一、 動機

三年生の時に張瑜珊先生の「日語分科教學法（二）」を選択し、CLIL（内容言語統合型学習）という指導法を学んだ。また、自ら教材を作成し、東海附属中学校の高校一年生向けの日本語の授業で50分間の授業を実施し、貴重な経験をもたらした。

一学期の学習と自身の経験を通して、入門レベルの日本語を学ぶ際に、多くの教師が伝統的な教授法を用いていることに気付いた。授業では、学生がその科目の範囲内の内容のみを学ぶことが多く、例えば、文法の授業では文法だけを学習するといった傾向が見られる。

そのため、CLIL 指導法を入門レベルの日本語教育に取り入れることに興味を持った。初学者が日本語を学ぶ時、言語にとどまらず、追加の知識も得られるようにしたいと考えている。

文献調査を行った結果、2018年以降、CLIL 指導法を取り入れた授業が徐々に増えていることがわかった。しかし、その多くは英語を中心としたものであり、日本語を授業言語とする例は少ない。そこで、入門レベルの日本語向けに50分間の授業を5つ設計することにした。これにより、日本語教師や学生にCLIL 指導法を知ってもらい、入門レベルの日本語教育に活用できるようにしたいと考えている。

## 二、 CLIL 指導法の概要

CLIL（内容言語統合型学習）指導法は、言語学習と学科内容を統合的に学ぶアプローチで、言語と他の学問分野を一緒に学ぶことで、学習者が自然に言語を使いながら知識を深めることを目指す。この方法では、単に語学力を向上させるだけでなく、内容に関連した新しい情報やスキルを習得することができる。CLIL 指導法では4Cという概念がある。4CはそれぞれContent（内容）、Communication（コミュニケーション）、Cognition（認知）、Culture（文化）である。これらはCLIL 指導法の基本的な枠組みで、言語学習と学科内容を統合する際に重要なポイントである。

CLIL 指導法には、Hard CLIL（ハードCLIL）とSoft CLIL（ソフトCLIL）2つのアプローチがある。Hard CLILは、学科内容を中心にした学習法であり、言語はあくまで学科内容を学ぶための手段として使用される。Soft CLILは、言語学習を中心としながら、内容を補完的に取り入れるアプローチである。こちらでは、言語能力を向上させるための授業

が中心となり、学科内容が言語学習のための素材として使用される。

### 三、 作品の構成

この5つの授業では、言語重視の Soft CLIL を採用した。授業の設計は言語学習を主な目標とし、内容を通じて言語習得を支援する形を取っており、純粹に教科内容を教えるものではない。例えば、ある授業では日本文化や社会問題をテーマとし、学生が日本語を習得しながら、追加の学問的知識も得られるようにした。

本作品は5つの独立した授業が含まれ、それぞれに授業用スライド、ワークシート、そして日本語と中国語の教師用マニュアルが用意されており、教師が簡単に活用できる構成となっている。教材のすべてのファイルはこの(<https://beginner-clil-japanese.my.canva.site/>) ウェブサイトに掲載されている。当サイトは閲覧専用。ファイルをダウンロードしたい場合は、サイト内のクラウドドライブをクリックしてください。

授業設計に先ずは、CLIL 指導法の概念を理解し、CLIL の 4C 枠組みに適合していることを確認した。

教案の作成を通じて、授業内容の適切性および学習目標の整合性を検証した。授業内容を実用的で生活に密着した内容とするため、「食・衣・住・行・育楽」五つのテーマを各授業の中心テーマとした。これらのテーマは日本文化と関連しており、学習者の学習意欲を高めることを目的としている。

また、授業には台湾に関連するトピックも取り入れている。これにより、学習者が日本語を学ぶ過程において批判的思考を働かせ、日本文化を理解するだけでなく、台湾の社会や文化についてもより深く考えるようにしている。

テーマを決定した後、各課の言語学習内容をさらに考えた。具体的には、文法や重要な語彙を設定した。その中でも、使用頻度の高い語彙は「目標単語」として定め、学習者が実際に使えるように工夫した。

各授業は以下の四つの部分で構成されている：

1. 導入（学習への興味を引き出す）
2. 文型学習（学習者のレベルに合った文法を教える）
3. テーマ学習（言語と内容を結びつける）
4. ディスカッション（応用と交流を行う）。

これらの各部分には、学習者の参加度や学習効果を高めるために、多様なアクティビティを取り入れている。たとえば、Kahoot を使ったリアルタイムのクイズで学習意欲を高めたり、動画の視聴で授業の内容を豊かにしたり、グループディスカッションによって会話力や協働学習を強化したりしている。

#### 四、 五つ授業の紹介

第一課のタイトルは「冷たい弁当のひみつ」である。日本の冷たい弁当をテーマに、日本の冷たい食文化を学び、台湾との食文化の違いを比較する内容となっている。「弁当」「健康」などの語彙や、「～と思います。」という文型を学習する。

授業は四つの主なステップで構成されている。まず、「崎陽軒の台湾進出」に関するニュース記事を導入とし、学生に関連する問いを投げかけてテーマへの関心を高める。次に、文型の解説と練習を行い、その後、日本の冷たい食文化について理解を深める。最後に、「台湾と日本の食文化：テイクアウトできる vs. できない」というテーマでディベートを行い、意見交換を促す構成である。

第二課のタイトルは「日本の伝統的な衣装を学ぼう」である。「和服と浴衣の比較」をテーマとし、日本の伝統的な衣装の特徴や着用される場面について理解を深めることを目的としている。また、「AはBより～」という比較の文型を使って意見を述べる練習を行い、「着物」「浴衣」「正式な」「カジュアルな」などの語彙も学習する。

授業は四つの主なステップで構成されている。まず、台湾の観光地での和服体験を導入として取り上げ、学生に関連する問いを投げかけて議論を行う。次に、「AはBより～」という比較の文型を学び、練習を通じて使い方を学習する。その後、Kahoot を活用し、浴衣と着物に関する知識を楽しく学びながら、語彙と文型の復習を行う。最後に、「着物警察」に関する文章を読み、内容について考え、関連する質問を答える活動を通して理解を深める。

第三課のタイトルは「日本の防災文化を学ぼう」である。「日本の防災対策と意識の違い」をテーマとし、日本における防災文化について理解を深め、台湾との比較を通して学習を行う。また、「なければならない」「なくてもいい」といった文型を用いて、「必ず行うべきこと」や「行わなくてもよいこと」を表現する練習を行い、防災に関する語彙も学習する。

授業は五つのステップで構成されている。まず、東京都が配布した防災グッズに関する

ニュースを導入とし、話題について自由に意見交換を行う。次に、文型「なければならない」「なくてもいい」の使い方を学び、練習問題を通じて理解を深める。その後、9月1日の「防災の日」や関連イベントについて学び、防災バッグの中身を用いた活動で文型の復習を行う。最後に、「能登半島地震」のニュース画像を分析し、日台における防災意識や対策の違いについて考察・議論を行う。

第四課のタイトルは「日本の交通と人身事故：安全のために考える」である。「人身事故」をテーマとし、その定義、発生頻度、社会的影響について理解を深める。また、「～ほうがいいです」という提言表現の文型を学び、交通安全に関する語彙を習得する。

授業は四つのステップで構成されている。まず、台湾と日本で発生した転落事故を導入とし、ニュース記事を読み比べることで、日台における落軌事故の発生頻度や背景の違いを理解する。次に、「～ほうがいいです」という文型を学習し、例文と練習を通じて提言表現の使い方を習得する。その後、ビデオを見て、日本における人身事故の現状やその社会的影響についてを深く学習する。最後に、日本の人身事故と台湾の地下鉄における傷害事件を比較し、それぞれの背景要因を分析したうえで、解決策について意見を出し合う。

第五課のタイトルは「商業化と文化の視角：日本のクリスマス」である。本課では、日本のクリスマス文化をテーマに、その特徴や商業化による影響について理解を深める。「～になると」という文型を学び、また、クリスマスに関する語彙も習得する。

授業は四つのステップで構成されている。まず、日本のクリスマスの雰囲気や行事を紹介する映像を視聴し、文化的な特徴を観察する。次に、「～になると」という文型を学習し、例文と練習を通して理解を深める。その後、日本におけるクリスマスの商業化現象、たとえば、KFCのマーケティング戦略やその社会的影響について考察する。最後に、「街が赤と緑に染まる時、財布の紐も緩む？クリスマス経済効果の光と影」の一部を読み、関連する問いに答えるとともに、台湾における中秋節の商業化についても話し合い、行事の文化的価値について考え、自分の意見を述べる。

## 五、 教学実践とフィードバック

五つの授業の作成が完了した後、私は第四課の内容を選び、実際に授業を試行した。対象として、CEFR A1レベルの日本語学習者四名を募集し、Teamsを利用してオンラインで授業を行った。授業終了後、学習者は授業内容や教授方法に対するフィードバックを提供してくれた。私はその意見を元に、以下の改善点を整理した。

まず、導入部分で使用した日本語の新聞記事について、時間の関係で全文を解説できなかったことが学習者にとって少し残念だったようである。もし新聞の内容を詳細に解析できれば、関連する背景知識の理解をより深めることができたかもしれないと学習者は感じた。

次に、文型の教習部分での文を作る連絡において、学習者の日本語の語彙力が限られているため、問題に答える際に少し困難を感じたようである。今後は、もっと多くの例文を提供したり、事前に語彙のヒントを準備したりすることで、学習者がスムーズに文型を使えるようにサポートすることができるだろう。

また、動画教材の部分について、学習者は最初に動画を一度通して見た後、二回目に逐語訳をつける形式を提案した。これにより、最初に動画の内容を自分で把握し、その後で翻訳を通じて理解が正しいかどうかを確認することができると考えられる。

今回の試教を通じて、自身の教員経験がまだ浅いため、実際の授業ではいくつかの部分に十分な配慮ができず、一部の学習者のニーズを完全に満たせなかったことに気づいた。しかし、教員経験が積み重なるにつれて、今後はよりスムーズに学生を導き、授業方法の改善を図ることができると頑張っている。

嬉しいことに、学習者はこの CLIL 教授法に対して非常に興味を持っており、日語能力を向上させるだけでなく、テーマに関連する新しい知識を学ぶことができる点が、学習意欲をさらに高める要因となったと感じている。

## 六、感想

CLIL 指導法が日本語初学者向け教材においてまだ普及していないため、教材設計の際には、資料収集や適切な学習活動の設計に多くの時間を費やした。また、面白いテーマを考え、内容と語学のバランスを取りながら、CLIL 教授法に適した教材を作成することが、この教材作成時に直面した課題である。そのため、何度も授業内容を調整しました。この教材は完璧ではなく、改善点はまだある。しかし、日本語学習者にとって、実用的で日常生活に密接したテーマを通じて言語能力を向上させる手助けとなり、また、CLIL 指導法に興味を持つ教師たちにとって参考になることを願っている。

また、今回の教材を自分で設計し、試教を行ったことで、教師としての苦労や責任を実感する。特に、学習者の多様なニーズに応えるために、教材の内容や進行ペースを調整することがどれだけ重要であるかを学んだ。教師としては、ただ知識を教えるだけでなく、

学習者一人一人の理解度や興味に合わせて柔軟に対応する力が必要だということを強く感じた。今後は、より多くの実践的な経験を通じて、教え方をさらに改善していきたいと思っている。

## 七、 參考資料

1. 原華耶. (2021). 日本語教育における CLIL に関する研究の動向. 東亜大学紀要, 33.  
file:///C:/Users/%E9%BB%83%E7%90%87%E9%9D%96/Downloads/EA20033000007.pdf
2. 郭淑齡. (2023). 『以 CLIL 結合 PjBL 教學法提升日語系生進行 USR 前專業能力之教學實踐研究:以玄奘大學應日系為例』
3. 邵士原. (2023). 當學科與英語共舞－初探 CLIL 的「整合」概念. 臺灣教育評論月刊, 12(5), p.151-156. <http://www.ater.org.tw/journal/article/12-5/free/10.pdf>
4. 伊藤佳代. (2024). 實體與線上混合跨文化協同學習法融入台日文化通識課程之教學實踐：以提升日語能力為觀點. 台灣日語教育學報, 42, p. 1-30.  
[https://doi.org/10.29758/TWRYJYSB.202406\\_\(42\).0001](https://doi.org/10.29758/TWRYJYSB.202406_(42).0001)